書物で見る

日本古典文学史

History of classical Japanese literature seen from old rare books

国文学研究資料館 通常展示

◆開室時間　午前10時～午後4時30分
※入室は午後4時まで
◆主　催　国文学研究資料館
◆入室料　無　料

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature

本展示では、上代から明治初期までの文学を、書物（古典籍）によってたどります。

最近の研究動向にも配慮はしましたが、むしろ教科書でなじみの深い作品を 中心に据えて、文学史の流れを示しました。写本の表情や版本の風合いに触れながら、豊かな日本古典文学史の諸相をお楽しみください。

This exhibition traces history of Japanese literature with books from ancient time to the beginning of Meiji period. We try to show the flow of Japanese literature history with familiar works as well as considering the recent study result. Please enjoy the various aspects of Japanese literature history as watching expression of manuscripts or texture of printed materials.

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」　解説一覧　第Ⅰ部

	名　称	解　説	
	Ⅰ　上代の文学		
	概説	日本史では「古代」という言葉が多く用いられますが、文学史では、平安時代より前を「上代」と呼ぶのが一般的です。その始まりは定かではありませんが、終わりの線は8世紀末に引かれます。政治的には国家が統一と制度の完成に向かった時代であり、文学との関わりで言えば、文字を持たなかった日本人が漢字という文字と出会い、漢字を使って表現する行為を、さまざまな形で試みて行った時代です。	
	上代の文学	延暦13年（794）、都が平安京に遷るまでの、主に大和に都があった時代の文学。神話・伝説・歌謡・和歌・漢詩文・伝記・歴史・地誌などにわたりますが、全体の著作数は多くありません。また、内容は古い時代のものを含んでいても、著作としてまとめられたのは、現存するものはいずれも奈良時代（710～794）で、国家の体制の整備を背景に成立したものが目に付きます。	
	神話・歴史	『古事記』は、和銅5年（712）成立。稗田阿礼が伝承していた古代の歴史を、太安万侶が筆録編集したもので、神代から推古天皇（在位593～629）までを収めています。『日本書紀』は、養老4年（720）成立。舎人親王撰。日本最古の官撰の史書で、神代から持統天皇（在位687～697）までを収めています。両書とも、神話・伝承や歌謡・和歌を多く含み、古代の日本人の感性と思想を知る上で重要な作品です。	
	地誌・伝承	『風土記』は、和銅6年（713）に元明天皇が諸国に撰進を命じた地誌で、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の五箇国のものが現存します。各国の地理や物産のほか、地名などに関わる伝承を記録しています。『古語拾遺』は、斎部広成が大同2年（807）に撰進したもので、『古事記』『日本書紀』を補う古代伝承の資料として注目されます（成立は平安時代初期ですが、便宜上ここに配列します）。	
	漢詩文・伝記	『懐風藻』は、天平勝宝3年（751）成立。中国文学の影響下に生まれた現存する日本最古の漢詩集で、近江朝（667～672）から奈良時代中期までの詩約120首を収めています。撰者は未詳で、淡海三船・葛井広成・石上宅嗣などの推定説があります。また漢文の伝記として、恵美押勝・延慶撰の藤原鎌足と子息の伝『家伝』、淡海三船撰の鑑真の伝『唐大和上東征伝』が伝わっています。	
	和歌	『万葉集』は全20巻で、何次かの編集段階を経て、奈良時代の末頃に成立したと考えられています。年代はほぼ舒明朝（629～642）から天平宝字3年（759）にわたり、作者は天皇から庶民に及び、約4500首を収めています。いわゆる万葉仮名で書かれているのが特徴です。主な歌人として柿本人麻呂・山上憶良・山部赤人・大伴家持らがあり、上代のみならず日本文学を代表する作品の一つです。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅱ部

	名　称	解　説	
	Ⅱ　中古の文学		
	概説	文学史では、平安時代を「中古」と呼びます。都が平安京に遷ってから、鎌倉幕府が成立するまでの約400年間で、ほぼ100年ごとに、初期・中期・後期・末期（院政期）に分けるのが一般的です。この時代は、天皇を中心とする貴族階級の人々が文学の主要な担い手でした。政治のおおよその形態により、天皇親政の初期、摂関政治の中期～後期、院政期に区分して、文学の変遷を見て行きます。	
	平安時代初期の文学	桓武天皇の延暦13年（794）の平安京遷都から、宇多天皇の寛平年間（889～897）頃までの、約100年間の文学。公的な文学として漢詩文が重んじられ、和歌はその陰に隠れた形になりましたが、日常的には和歌が変わらず詠まれていました。なお、新しいジャンルとして、物語と説話集が現れたことは特筆されます。	
	漢詩文	平安時代初期は、「文章経国」（漢詩文によって国を治める）の思想を背景に漢詩文が盛んに作られ、小野岑守撰『凌雲集』、藤原冬嗣ほか撰『文華秀麗集』、良岑安世ほか撰『経国集』のいわゆる勅撰三集が、810～20年代にあいついで成立しました。ほかに個人の詩文集として、宗教的な詩に特色のある空海の『遍照発揮性霊集』、都良香の『都氏文集』、島田忠臣の『田氏家集』などが伝わっています。	
	和歌	平安時代初期の和歌は、いわゆる六歌仙（遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰・小野小町・大伴黒主）に代表され、遍昭・業平・小町についてはその歌集が伝わっています。この時期の終わり頃には、現存最古の歌合である『在民部卿家歌合』や、『寛平御時后宮歌合』といった歌合も成立しました。大江千里の『句題和歌』は、漢詩句の内容を和歌に表現したものとして注目されます。	
	歌謡	平安時代初期頃に成立したと推定される歌謡として、神事、特に宮中の御神楽で用いられる神楽歌、諸社の神事で舞われた東遊（東国風の舞）に伴う東遊歌、地方民謡である風俗歌、民謡の歌詞に雅楽風の節付けをした催馬楽があります。和琴の伴奏で歌われる琴歌を収録した『琴歌譜』も、この時期に成立しました。	
	物語	『竹取物語』は、竹取の翁が竹の中から見つけて育てたかぐや姫が、美しく成長した後、貴公子たちの求婚を難題によって退け、天皇からの召しも断り、八月十五日に月の世界に帰って行くという伝奇的浪漫的な話です。『源氏物語』絵合巻において「物語の出で来はじめの祖」と言われているように、作り物語の最初の作品と考えられ、この時期の末頃の成立と推定されています。	
	説話集	『日本霊異記』は、正式な書名を『日本国現報善悪霊異記』と言い、薬師寺の僧景戒によって弘仁13年（822）頃編まれたもので、日本最古の仏教説話集です。雄略天皇から嵯峨天皇（在位809～823）の時代までの因果応報説話と霊験説話116話を、ほぼ年代順に、3巻に分けて収めています。	
	平安時代中期～後期の文学	醍醐天皇の昌泰年間（898～900）頃から、11世紀の末頃までの、約200年間の文学。『古今和歌集』の撰集を機に和歌が公的な位置を確立し、物語文学の代表作『源氏物語』が書かれるなど、王朝文学の最盛期と言える時代です。日記や随筆、軍記といった新たなジャンルも登場しました。和歌・物語・日記が盛んになった背景に、平仮名の普及があったことも忘れることはできません。	
	漢詩文	前の時期に引き続き、文人貴族の間で漢詩文が盛んに作られました。撰集として、代表的なものに紀斉名撰の『扶桑集』、高階積善撰の『本朝麗藻』、藤原明衡撰の『本朝文粋』があり、個人の詩文集として菅原道真の『菅家文草』などが伝わっています。藤原公任撰の『和漢朗詠集』は、収録された漢詩文の秀句が後代の文学に与えた影響の大きさにおいて重要です。	
	和歌	この時期は、和歌が漢詩文の下風を脱して、公的な文学としての地位を確立しました。その象徴としての最初の勅撰集である延喜5年（905）撰進の『古今和歌集』を初めとして、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の勅撰集が成立し、私撰集や個人の歌集が編まれ、歌合が盛んに催されました。代表的な歌人に、紀貫之・和泉式部らがあります。藤原公任の『新撰髄脳』などの歌論も書かれています。	
	日記・随筆	個人の日々の体験や心情を仮名文で綴った日記文学も、この時期に現れました。紀貫之の『土佐日記』、藤原道綱母の『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、菅原孝標女の『更級日記』が代表的な作品です。清少納言の『枕草子』は、中宮に仕える女房としての生活を踏まえた日記的章段を含みつつ、多くの話題にわたり、随筆という文学形式を確立した点で	
	物語	平安時代中期～後期は、物語文学の最盛期と言ってよいでしょう。『伊勢物語』『大和物語』といった短章の歌物語、『うつほ物語』『落窪物語』といった長編の物語を経て、物語文学の代表作である『源氏物語』が書かれ、その影響を強く受けつつ、『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』が成立しました。短編物語集『堤中納言物語』も、特色ある作品として注目されます。	
	歴史物語	歴史物語は、物語の形式・文体で歴史を叙述するもので、宇多天皇（在位887～897）から堀河天皇の寛治6年（1092）まで（正編は後一条天皇の万4年（1027）まで）を扱った『栄花物語』が、最初の作品と考えられます。ついで文徳天皇の嘉祥3年（850）から後一条天皇の万寿2年（1025）までを扱った『大鏡【おおかがみ】』が書かれ、独自の批判的視点に特色を示しています（『大鏡』については、院政期の成立と考える説もあります）。	
	軍記	戦乱を題材にした文学である軍記も、この時期に現れました。関東の平将門の承平・天慶の乱（935～940）を扱った『将門記』、奥州の安部氏討伐の前九年の役（1051～62）を扱った『陸奥話記』があり、合戦とそれが起こるに至った経緯を叙述しています。	
	説話・伝記集	仏教系の説話・伝記集として、源為憲が撰した説話集『三宝絵』、慶滋保胤が撰した往生者の伝記集『日本往生極楽記』、鎮源が撰した法華経とその信仰者の霊験・伝記集『大日本国法華経験記』があります。『三宝絵』は仮名文、他の二書は漢文で書かれています。いずれも、次代の『今昔物語集』の素材となった点でも文学史的に重要です。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅱ部

	名　称	解　説	
	院政期の文学	11世紀の末から12世紀の末までの、ほぼ100年間の文学。白河院の院政が始まった応徳3年（1086）と、鎌倉幕府が開かれた文治元年（1185）が、それぞれ始期と終期の目安になります。平安時代と鎌倉時代の橋渡しをした時期に当たり、中世文学の胎動期と位置付けることができます。	
	漢詩文	前代に比べると文学の中での相対的地位はやや低下したものの、漢詩文は依然として行われていました。撰集として『本朝無題詩』『本朝続文粋』『中右記部類紙背漢詩集』があり、個人の詩集として藤原忠通の『法性寺関白御集』などがあります。藤原基俊によって、『和漢朗詠集』を継いだ『新撰朗詠集』も編まれました。	
	和歌	院政期にも和歌は引き続き盛んで、勅撰集として『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』が成立したのを初め、私撰集がしばしば作られました。代表的歌人として、源俊頼・西行・藤原俊成らがあります。『堀河百首』以下の百首歌がたびたび編まれたこと、源俊頼『俊頼髄脳』・藤原清輔『奥義抄』などの歌学書・歌論書があいついで著作されたこともこの時期の特徴です。	
	歌謡	平安時代中期頃に起こった新しい歌謡である今様は、やがて貴族階級にも流行が及びました。後白河院撰の『梁塵秘抄』は、今様を初め「雑芸」と総称される流行歌謡を集大成したものですが、多くの巻が散佚し、一部の巻のみが伝わっています。宗教的な歌謡のほか、庶民の生活や心情を歌った歌謡も多く、広く親しまれています。平安時代後期以後、長編の仏教歌謡である和讃も多く作られました。	
	物語・歴史物語	院政期は、物語文学が衰退に向かった時期ですが、なおいくつかの作品が作られました。女装の男君と男装の女君の兄妹を主人公とする異色作『とりかへばや物語』や、『在明の別』などが伝わっています。また歴史物語として、『大鏡』の後を嗣ぎ、後一条天皇の万寿2年（1025）から高倉天皇の嘉応2年までを収めた『今鏡』が書かれました。作者は藤原為経（寂超）とする説が有力です。	
	説話・伝記集	全31巻1000余話から成り、日本の説話文学を代表する作品である『今昔物語集』は、この時期に成立しました。平康頼撰とされる『宝物集』は、院政期の終わりに原形ができたようです。紀伝道大江家の学者大江匡房の言談を筆録した『江談抄』も、説話に関して逸し得ない作品です。また、末法思想による浄土信仰を反映して、大江匡房撰『続本朝往生伝』・三善為康撰『拾遺往生伝』などがあいついで成立しました。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅲ部

	名　称	解　説	
	Ⅲ　中世の文学		
	概説	中世は、12世紀末から16世紀までの約400年間を指します。それまで権力を握っていた貴族や寺社勢力に加え、新たに武士が力を伸ばした時代です。政治の実権が武士へ移行した鎌倉時代に始まり、天皇が巻き返しを図り混迷した南北朝時代、再び武家の政権となった室町時代を経て、下克上の安土桃山時代に至るまで、不安定な政局と度重なる戦さは文学にも多大な影響を与えました。	
	鎌倉・南北朝時代の文学	文治元年（1185）、鎌倉に幕府が開かれると、東国は存在感を増し、文学にも影響を及ぼします。地方や民衆を描いた説話文学が発展し、旅を素材とした紀行文学も生まれました。戦乱は、京の文化を地方に広げるとともに、現実社会への批判や歴史への関心を高め、軍記や史論が盛んに作られます。不安な日常から人々は救いを求め、仏の教えを説いた法語や無常観を根底とした隠遁者の文学が誕生します。	
	和歌	武家に対抗した後鳥羽院は、貴族文化の和歌を推進します。史上最大規模の「千五百番歌合」が催され、八代集の最後を飾る『新古今和歌集』が編纂されました。私家集では、万葉調の歌を詠んだ源実朝の『金槐和歌集』が名高く、この頃、藤原定家の撰とされる『小倉百人一首』も編まれます。和歌への批評意識から、定家の『近代秀歌』や鴨長明の『無名抄』など歌論も作られました。	
	歌謡	東国の鎌倉では、前代の今様をうけて、七五調を主とした早歌（宴曲）と呼ばれる長編の歌謡が武家の間で愛好されます。拍子が早いために早歌と名付けられ、芸能者ではなく、武士が自分で歌う歌として作られました。『源氏物語』などの古典のほか、仏典や漢籍を出典とし、武士の教養の向上にも役立ちました。早歌の大成者である明空の撰んだ『宴曲集』が知られています。	
	物語	鎌倉時代に入っても、王朝文化への憧れから宮廷社会の恋愛を題材とした物語が数多く作られました。鎌倉初期の物語評論『無名草子』には、多数の作品名が見られますが、現存する物語はわずかです。現存の物語では、継母の迫害を逃れた姫君が長谷寺観音の霊験により幸せな結婚にいたる『住吉物語』などは題材や趣向に工夫を見せ、絵入り本も数多く制作されました。	
	軍記物語	戦乱のたびに語り伝えられた英雄伝などが記録され、軍記物語が誕生します。鎌倉初期の『保元物語』『平治物語』は、和漢混交文で生き生きと武将たちの活躍を描きます。続く『平家物語』は平氏の興亡を語る軍記物語の一大巨編で、多くの語り手や読者の手を経て、改訂・増補が繰り返されました。南北朝の内乱を中心とする『太平記』は政治や社会への鋭い批判がうかがえます。	
	歴史物語・史論	平安時代の『大鏡』『今鏡』のあとを受けて、鎌倉初期に『水鏡』、南北朝期には『増鏡』が書かれました。京都の宮廷生活を描いた『増鏡』には、作者の王朝社会への憧れがうかがえます。また、相次ぐ戦乱を反映して、歴史の背後にある原理を解き明かそうとする史論も登場します。北畠親房による『神皇正統記』は、神道を基本に南朝の正当性を強く主張しています。	
	日記・紀行	新しい政治都市鎌倉の誕生によって、東海道は整備され、京と鎌倉を往来する旅を素材として日記や紀行文が成立しました。東海道の情景と旅情を描いた代表的な紀行文学に、『海道記』『東関紀行』があります。藤原為家の後妻となった阿仏尼による『十六夜日記』は、実子の為相と先妻の子為氏との間で生じた所領争いの訴訟のため、鎌倉に下向する様子を綴っています。	
	随筆	動乱の時代、新しい社会に不安を抱いたり、不満や批判を持ったりした人々の中には、出家して俗世を離れた隠者（隠遁者・世捨て人）となる人たちがいました。山里に庵を結んだり、諸国を遊行したりして無常を観じ、仏道修行に励み、いくつかの文学作品を残したのです。中世文学の特徴である無常観を基調とした、鴨長明の『方丈記』と兼好の『徒然草』は隠者文学の双璧といえます。	
	説話	中世は説話の時代と言われるほど、数多くの説話集が誕生します。新時代の到来は、地方や庶民の世界の話に新鮮な興味を呼び起こし、盗賊や大力の女の話など世俗の説話や「こぶ取り」などの民話を語る『宇治拾遺物語』が編まれました。戦乱の世で仏教信仰も高まるなか、通俗的な例話をもとに教理を巧みに説いた無住の『沙石集』などの仏教説話集も著述されました。	
	五山文学	鎌倉時代に伝来した禅宗は、幕府の保護を受け、鎌倉・京の五山の寺を中心に栄えます。夢窓疎石や虎関師錬など幅広い学識を持つ五山僧によって、漢詩文を中心とした漢文芸が盛んになります。『夢中問答集』は、足利尊氏の弟直義の質問に答えて夢窓が禅の教えを述べた法語で、五山で開版されました。室町時代には、義堂周信や絶海中津などの学僧も活躍し、連歌にも影響を与えました。	
	室町・安土桃山時代の文学	長く続いた内乱も、三代将軍足利義満の頃には次第に収まり、明徳3年（1392）、南北朝の合一が実現します。文学は芸能と融合し、享受層を拡大します。和歌の余技として始まった連歌は庶民にも広まり、民衆の芸能であった能・狂言は貴族や武士にも愛好されました。民衆や異類などを積極的に取り込んだ物語絵が作られ、町衆の思いをうたった小歌も流行します。文学・芸能の成立や受容の場で、庶民が大きな影響力を持つに至ります。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅲ部

	名　称	解　説	
	和歌	室町時代になると、『新続古今和歌集』を最後に勅撰集は幕を閉じます。足利義教に嫌悪され、勅撰集への入集を拒否されたものの、流派にとらわれない旺盛な作歌活動を展開した室町歌人として、正徹が注目されます。『草根集』には一万首を越す詠歌が伝えられ、弟子による聞き書き『正徹物語』には、余情・妖艶の新古今調への復帰を主張し、藤原定家を尊崇する姿勢がうかがえます。	
	連歌	連歌は、和歌の上の句と下の句を別の人が詠み、その唱和のしかた（付け合い）を楽しむ文芸です。平安時代から和歌の余興としてなされ、南北朝時代に、時の関白二条良基らによって初の連歌集『菟玖波集』が編まれます。室町時代には心敬などの連歌師が現れ、連歌論集『ささめごと』を著し、宗祇らの『新撰菟玖波集』によって大成し、俳諧の連歌から近世の俳諧へと継承されます。	
	歌謡	室町時代になると、宮廷歌謡の大歌に対し、七五調をもとにした自由な詩型の小歌が流行します。男女の恋愛をうたったものが多く、話し言葉なども取り入れられ、庶民の感情を生き生きと伝えています。『閑吟集』や『宗安小歌集』といった小歌の歌集も編纂され、なかには能や狂言、お伽草子の詞章とよく似たものも多く、互いに影響を与えていたことがうかがえます。	
	御伽草子	室町時代から江戸前期にかけて、お伽草子と総称される短編の物語が数多く作られます。都市文化の発達に応じて、それまでの貴族の恋愛や英雄の活躍だけでなく、『浦島太郎』『文正草子』など庶民を主人公にしたものや、異類による合戦を描いたなどの物語が盛んに作られたのです。その多くは絵が付けられ、絵巻や奈良絵本として、さまざまな人々に愛好されました。	
	軍記物語	源義経の悲劇的な生涯を描いた『義経記』や、曾我兄弟の仇討ちを物語る『曾我物語』など、合戦の群像ではなく、個人の運命を描いた物語が作られます。悲劇の運命をたどった者への共感と鎮魂の思いの込められた「語り」を通して、人々に享受されました。「判官物」「曾我物」として、物語だけでなく芸能や絵画などにも展開し、後世まで長く語り継がれていきました。	
	説話・縁起	相次ぐ戦乱で後ろ盾を失った寺社は、自らの存続をかけて正当性を主張し、信仰を宣布するため、数多くの寺社縁起や宗派の祖師伝を制作しました。絵巻や掛け幅の絵伝に仕立てられ、時には民衆の前で披露されました。和歌山県の道成寺の縁起は、歌舞伎で知られる安珍・清姫の伝説を伝えています。絵巻を見せながら物語を語る「絵解き」は現在も道成寺で行われています。	
	能・狂言	平安時代までの猿楽や田楽は演劇色を強め、専門の芸能集団（座）も現れ、有力な寺社に所属しました。大和猿楽四座のうち、結崎座に出た観阿弥・世阿弥親子は、能の台本である謡曲の作者として、また能役者としても優れ、能を芸術として大成します。一方、庶民的な喜劇である狂言は、社会風刺や権力批判を込めて口語で演じられ、やがて能と能の間に上演されるようになります。	
	幸若舞曲・説経	室町後期になると、物語に合わせて舞われた幸若舞（曲舞）や「ささら」という楽器に合わせて語られた説経節など「語り物」の芸能が流行します。幸若舞は『義経記』や『曾我物語』などに取材したものが多く、武将の間で人気を博しました。「山椒大夫」や「小栗判官」など新たな迫力のある物語を生み出した説経節は、民衆の心をとらえ、近世の浄瑠璃の源流となりました。	
	キリシタン文学	16世紀に渡来したキリスト教の宣教師たちは、布教や日本語学習のためにローマ字で翻訳・著述活動をおこないました。天草版【あまくさばん】『平家物語』やイソップ童話のローマ字での和訳本の天草版『伊曾保物語』、イエズス会によるカトリック教会の教理本『どちりな・きりしたん』やポルトガル語の辞書の『日葡辞書』などがあります。当時の口語を知ることができる貴重な書物です。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅳ部

	名　称	解　説	
	Ⅳ 近世の文学		
	概説	近世は、１７世紀初頭から１９世紀後半までの約２７０年間を指します。それまでの写本の時代から刊本の時代へと移ったこと（出版文化の普及）が最大の特徴です。文学の享受層は多岐に及んで大衆化し、漢詩・和歌といった伝統的な雅文学から俳諧・小説・芸能などの俗文学に至るまで、多彩に展開しました。前期は上方中心、徐々に文運東漸して、後期は江戸が中心となりました。	
	江戸前期の文学	幕初から元禄あたりまで（１６０３‐１７０４）、おおむね１７世紀を「前期」と捉えます。整版本の普及によって古典が広く継承されると、今度はそこに同時代の文芸が花開きます。京・大坂などの上方を中心として公家と武家が文化を領導する一方で、徐々に町人も台頭し、元禄期（１６８８‐１７０４）には松尾芭蕉・井原西鶴・近松門左衛門が華々しい活躍を見せました。	
	漢詩・漢学	儒者は、人倫道徳を重んじて現実を尊重したので、漢詩文はあくまでも余技に過ぎませんでしたが、他方、隠者石川丈山と日蓮宗僧侶元政は、儒学と切り離して詩文を深く修めました。貞享・元禄期（１６８４‐１７０４）になると、京に伊藤仁斎が登場し、人情を寛容に受け止める儒学説（仁斎学・古義学）を主唱、漢学を朱子学の道学主義から解放する緒を切り開きました。	
	和歌・和学	細川幽斎が没すると古今伝授は御所へと入り、後水尾院・霊元院が堂上歌壇を領導、これとは別に地下歌人たちも門流ごとに勢力を拡大させます。堂上・地下を問わず、二条派風の温雅な詠風が特徴ですが、木下長嘯子など異色の歌人も現れました。出版が普及して多くの古典に流布本が備わる一方で、契沖は古典研究に文献学の方法を持ち込んで大きな成果を挙げました。	
	俳諧（貞門）	寛永１０年（１６３３）に最初の俳諧撰集『犬子集』が刊行されると俳諧は一気に流行します。貞門は松永貞徳を中心とする一派の総称で、俳諧を「俳言を以て作る連歌」と規定し、言語遊戯による微温的な俳風を旨としました（おおむね中本か横本）。主要俳人は安原貞室・松江重頼ほか。談林との対立期を経て衰えますが、細々とした命脈を天保期（１８３０‐４４）まで保ちました。	
	俳諧（談林）	談林は大坂天満宮の連歌所宗匠西山宗因を中心とする一派の総称で、寛文末年（‐１６７３）頃に誕生、俳諧を「寓言」と規定して、破調や字余り、極端な擬人法などを旨とした猥雑かつ奔放な俳風で一世を風靡しました（横本が多い）。速吟による矢数俳諧は特に有名です。主要俳人は井原西鶴・岡西惟中ほか。延宝末年（‐１６８１）頃には衰退、流行はわずか１０年ほどでした。	
	俳諧（芭蕉）	貞門・談林を経験した松尾芭蕉は、貞享元年（１６８４）、４１歳で蕉風に開眼（『冬の日』）、以後は旅を続けながら句境を深めてゆきます（『笈の小文』ほか）。元禄期（１６８８‐１７０４）には「不易流行」を提唱（『おくのほそ道』／枡型本）、俳風は一段と円熟味を増し最晩年には「軽み」を主唱しました。主要門人は向井去来・野沢凡兆ほか（蕉門の撰集はおおむね半紙本）。	
	小説（仮名草子）	仮名草子は、幕初から天和２年（１６８２）に『好色一代男』が登場するまでの間に著わされた小説・随筆類の総称（強いて言えば大本が多い）。「仮名」は漢文に対しての用語で、平易な娯楽的読み物を意味します。啓蒙教訓的なもの（『清水物語』）、翻訳もの（『伽婢子』）、擬古的なもの（『犬枕』『仁勢物語』）、軍記的なもの（『大坂物語』）等々、内容は多岐にわたります。	
	小説（西鶴）	井原西鶴は、天和２年（１６８２）に『好色一代男』を刊行してから小説を量産、当代社会の色欲や金銭、武士や庶民の精神を、即物的に話術巧みに描き出しました（おおむね大本）。他の好色物に『好色五人女』、武家物に『武家義理物語』、雑話物に『西鶴諸国はなし』、町人物に『世間胸算用』などがあり、さらに『西鶴置土産』ほか西鶴没後に弟子の北条団水が編刊したものも知られます。	
	演劇（近松）	古浄瑠璃の時代を経て元禄期（１６８８‐１７０４）が近づくと、近松門左衛門が登場します。想像力溢れる時代物（『世継曾我』『国性爺合戦』）、人間の生の悲しさを情感豊かに描いた世話物（『曾根崎心中』『心中天の網島』）など、多くの浄瑠璃を遺しました。実とも虚とも言い切れない微妙な表現こそ初めて人を感動させられるという「虚実皮膜論」（『難波土産』）も有名です。	
	江戸中期の文学	宝永頃から天明あたりまで（１７０４‐１７８９）、おおむね１８世紀を「中期」と捉えます。宝暦・明和（１７５１‐７２）を境として文化の中心が上方から江戸へと移り（文運東漸）、双方の地で多様な文芸が展開しました。本居宣長・大田南畝・与謝蕪村・上田秋成など雅俗両面にわたって多士済々、近年ではこの１８世紀こそ近世文化の最盛期とする見方も出されています。	
	漢詩・漢学	正徳・享保期（１７１１‐３６）には、江戸に荻生徂徠が出て独自の儒学説（徂徠学）を展開、その門流（古文辞派）の中には、服部南郭など詩文を専修する詩人が輩出して、漢学の儒学からの分離が進みました。やがて江戸に山本北山が登場し、古文辞派による擬古主義を痛烈に批判、自己の真情と目前の景を率直に詠うべきだと主張して、詩壇は唐詩風から宋詩風へと転換します。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅳ部

	名　称	解　説	
	和歌・和学	堂上歌壇最後の領袖は冷泉為村で、江戸の武家方をはじめ各地に門人を抱えましたが、その為村に破門された小沢蘆庵は「ただこと歌」を提唱、心情を平易なことばで詠うことこそ大切だと主張しました。賀茂真淵・本居宣長が登場して国学も大きく進展、「もののあはれを知る」（『源氏物語玉の小櫛』ほか）説は、中世以来の教戒的文学観から文学を解放した画期的なものでした。	
	狂詩・狂歌	狂詩は狂体の詩。狂者精神に基づいた狂文とともに宝暦・明和（１７５１‐７２）の頃に流行（当初は小本、のち中本）、大田南畝の『寐惚先生文集』はその代表的作品です。狂歌は狂体の和歌。爆発的に流行したのは天明狂歌（江戸狂歌）で、唐衣橘洲・大田南畝・石川雅望らが機知と滑稽を高らかに詠い上げ、多くの狂歌本が出版されました。極彩色の狂歌絵本も知られます。	
	俳諧	享保期（１７１６‐３６）における江戸座の組織化や美濃派の拡大を経て、徐々に芭蕉復古の機運が醸成されます。安永・天明期（１７７２‐８９）になると、与謝蕪村（京）・加藤暁台（名古屋）らが登場して天明俳諧（中興俳諧）が開花、文人趣味に基づいた唯美的世界を示しました。絵師でもあった蕪村は、文人画だけでなく、『奥の細道画巻(ほそみちえまき)』など俳画(はいが)にも大きな足跡を遺しました。	
	川柳	川柳は、雑俳で前句が省略されたもの。俳諧の発句と同じ「五・七・五」の十七音ですが、季語と切字が不要で、俳諧よりもいっそう大衆性が強く、人情や世相を機知的に詠います。創始者は柄井川柳。明和２年（１７６５）に刊行が始まった『誹風柳多留』（百六十七編）はその代表的作品です（小本）。「六歌仙　六をかけても　歌仙なり」（同書三十三編）、こんな調子です。	
	小説（浮世草子）	浮世草子は、天和２年（１６８２）刊の『好色一代男』以降、宝暦・明和（１７５１‐７２）頃までに主に上方で著わされた小説類の総称。中核は西鶴本（おおむね大本）と八文字屋本（横本の帳綴じ本〈横綴じ半紙本とも〉など）で、主要作家は井原西鶴・江島其磧・多田南嶺ほか。『雨月物語』発表以前の上田秋成（和訳太郎）『諸道聴耳世間猿』『世間妾形気』も浮世草子に数えられます	
	小説（前期読本）	読本は、寛延（１７４８‐５１）頃から幕末にかけて、中国白話小説を翻案して趣向とし、勧善懲悪・因果応報の内容を雅俗折衷の和漢混淆文で綴った小説群のこと。「初期読本」（前期読本・上方読本）と「後期読本」（江戸読本）に分けられます。初期読本の嚆矢は寛延２年（１７４９）刊の都賀庭鐘『英草紙』、代表作は上田秋成の『雨月物語』です（基本型は半紙本５冊）。	
	小説（談義本）	談義本は、宝暦に始まる半紙本仕立ての読み物（３冊から５冊）。淵源は正徳・享保期（１７１１‐３６）の増穂残口や佚斎樗山の教訓色の濃い作品群で、諷諫を主に当世の風俗を滑稽な表現によって描きました。旧来の文学史では「滑稽本(こつけいぼん)」に括(くく)られていましたが、近年は「談義本」の名称が確立、平賀源内(ひらがげんない)の『根南志(ねなし)具佐(ぐさ)』などが代表作です。	
	小説（黄表紙）	黄表紙は、草双紙（絵の余白に文章を書き入れて５丁を１冊とし、江戸で刊行された中本型の読み物）の一形態。幼童向けの赤本・黒本青本とは異なり、「うがち」による知的描写を備えた知識層向けです。嚆矢は、安永年（１７７５）刊の恋川春町作『金々先生栄花夢』。天明期（１７８１‐８９）に黄金時代を迎えました。山東京伝の『江戸生艶気樺焼』（天明５年刊）などが高名です。	
	小説（洒落本）	洒落本は、滑稽をねらった「うがち」によって遊里の当世風俗を活写したもの（基本型は小本１冊。蒟蒻本とも）。享保末（‐１７３６）から天保・弘化（１８３０‐４８）までを範囲とし、特に安永・天明期（１７７２‐８９）に最盛期を迎えました。明和７年（１７７０）刊の『遊子方言』でその様式が確立、第一人者は山東京伝で、『通言総籬』『傾城買四十八手』などが知られます。	
	演劇（浄瑠璃）	大坂道頓堀の竹本座と豊竹座が競い合って作品を発表し、人形浄瑠璃は最盛期を迎えます（正本〈浄瑠璃の刊本〉はおおむね半紙本）。この頃、複数の作者による分担執筆が一般化、『菅原伝授手習鑑』は竹田出雲・並木宗輔ら４人の合作、『義経千本桜』と『仮名手本忠臣蔵』は竹田出雲（二世）ら３人の合作です。近松半二)以降衰退しますが、今でも文楽の名で生き残っています。	
	江戸後期の文学	寛政頃から慶応末まで（１７８９－１８６８）、おおむね１９世紀を「後期」と捉えます。中心は江戸へと移り、十返舎一九や曲亭馬琴ら職業作家も出現、地方にも良寛（越後新潟）、橘曙覧（越前福井）、小林一茶（信濃）など、種々の個性的な作家が登場しました。ピークの文化・文政期（１８０４‐３０）には、他に香川景樹・式亭三馬・鶴屋南北（四世）らが活躍します。	
	漢詩・漢学	備後神辺の菅茶山は日常的な詩情を重視して清新な詩風を示し、他方、市河寛斎を盟主とする江湖詩社からは、やはり宋詩風を重んじた大窪詩仏や柏木如亭が現れて化政期（１８０４‐３０）詩壇を牽引しました。詠史詩に特徴を見せた頼山陽や、江馬細香ら女流も出現、三都を中心に地方にも高名な詩人が輩出して漢詩は隆盛を極め、この傾向は明治の半ばあたりまで続きました。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ⅳ部

	名　称	解　説	
	和歌・和学	小沢蘆庵に私淑した香川景樹が「しらべの説」を主唱して和歌の革新を進め、桂園派は全国を席捲します。その流れは幕末の八田知紀を経て高崎正風へと継承され、明治の御歌所へと展開しました。そうした全国的な動きとは別に、良寛（越後新潟）や橘曙覧（越前福井）・大隈言道（筑前福岡）らの地方歌人、野村望東尼・大田垣蓮月などの女流歌人も独自の地歩を築きました。	
	俳諧	寛政４年（１７９２）の芭蕉百回忌を機に芭蕉の神格化が進み、俳諧は一気に大衆化・低俗化に向かいます。天保俳諧の中心には成田蒼虬や桜井梅室がいましたが、他方、農村出身の小林一茶（信濃）は独自の作品を遺し、その人間味溢れる生活詩は異彩を放ちました。月並俳諧は隆盛を極めましたが、それはやがて明治に至って正岡子規から月並調として激しく批判されました。	
	小説（後期読本）	後期読本の典型は浪漫的長編小説で、主要作家は山東京伝（『桜姫全伝曙草紙』『昔話稲妻表紙』）と曲亭馬琴（『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』）です。特に馬琴は、中国長編小説に影響を受け壮大な構成力に優れました。後期読本の大半は稗史物（半紙本）ですが、図会物（『源平盛衰記図会』／大本）や絵本物（『絵本忠臣蔵』）、中本物（『翁丸物語』）も出版されました。	
	小説（滑稽本）	滑稽本は、庶民生活の中の大衆的な笑いを描いた中本型の小説類のこと。嚆矢は、享和２年（１８０２）に刊行された十返舎一九の『東海道中膝栗毛』初編で、化政期（１８０４‐３０）を頂点とします。『膝栗毛』とともに、式亭三馬の『浮世風呂』四編（文化６年‐同１０年刊）が高名です。会話体を効果的に利用して、寛政の改革以前とは異質の、新しい〈笑い〉をもたらしました。	
	小説（人情本）	人情本は、女性を対象に、会話を多用しつつ芝居や恋愛を描いた中本型の風俗小説のこと。嚆矢は、文政２年（１８１９）に刊行された十返舎一九『清談峰初花』と滝亭鯉丈『明烏後正夢』で、天保期（１８３０‐４４）にピークを迎え、明治初期まで続きました。主要作家は、人情本の元祖を自認した為永春水、『春色梅児誉美』四編（天保３‐４年刊）はその代表作です。	
	小説（合巻）	合巻は、黄表紙のあとを承けて文化４年（１８０７）以降に刊行された草双紙の総称（やはり中本型で５丁を１巻とし、数巻をまとめて１冊とする）。伝奇色と娯楽色の濃い長編です。文政・天保期（１８１８‐４４）にピークを迎え、明治初期まで続きました。代表作は、柳亭種彦作『偐紫田舎源氏』三十八編（文政１２年‐天保１３年刊）。他に、柳下亭種員ら作『白縫譚』など。	
	演劇（歌舞伎）	化政期（１８０４‐３０）には鶴屋南北（四世）が登場、「生世話」（写実的な演出）というジャンルを確立させます。代表作は『東海道四谷怪談』（文政８年〈１８２５〉初演）、お岩の髪梳きの場面など、悲惨さを効果的に演出しました。展示本は、筋書きを挿絵入りで紹介した正本写し合巻の『東街道中門出魁　四ツ家怪談』（文政９年刊、初印本の外題は「名残花四家怪譚」）。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　第Ｖ部

	名　称	解　説	
	Ｖ　近代の文学		
	概説	日本史では、明治以降が広く「近代」で、文学史も同様です。徳川幕府に代わった明治新政府の下、欧米諸国に追いつくため急速な近代化が図られました。欧米の文物や思想が一挙に流入し、文学もその影響を直接間接に受けざるを得ませんでした。ここでは、日本古典文学史の締め括りとして、江戸時代までの文学が次第に表舞台から退き、近代文学が本格的に始動する萌しを見せた、明治20年頃までを扱います。	
	明治時代初期の文学	明治元年～20年（1868～87）頃の文学。明治維新とともに政治制度・社会制度が大きく転換し、日本の近代が始まります。明治時代前半はまた古い文化と新しい文化の交代期に当たり、文学においても、江戸時代以来の系譜を引く作品と、ヨーロッパ文学の影響を受けた作品が並存していました。近代文学の始まった時期であり、古典文学の時代の終わりとも言えます。	
	明治期戯作	「戯作」は、江戸時代後期以降の談義本・滑稽本・洒落本・黄表紙・合巻、また読本・人情本などを指します。明治以後、江戸時代からの戯作の方法・様式で、題材を新時代に取った作品が現れました。急激な開化による混迷した世相を風刺する仮名垣魯文の『安愚楽鍋』・万亭応賀の『青楼半化通』や、魯文の『高橋阿伝夜叉譚』などがあります。	
	小説･評論	ヨーロッパの小説の影響を受けつつ、自由民権運動をも背景に、政治を主テーマにした政治小説が明治10年代に出現しました。矢野龍渓『経国美談』・東海散士『佳人之奇遇』などに代表されます。ロシア文学に学んだ二葉亭四迷の『浮雲』は、明治20年に第一編が発表され、近代小説の最初を印した作品となりました。ヨーロッパの小説論に基づく理論として、坪内逍遥の『小説神髄』、二葉亭四迷の『小説総論』があります。	
	芸能（歌舞伎･落語）	明治政府は、演劇改良を唱え、歌舞伎に文明国にふさわしい内容と性質を求めました。江戸時代の末から主要な作者であった河竹黙阿弥は、これに応え、新しい社会風俗を取り入れた世話物の散切物、史実に即した時代物の活歴物を創作しましたが、一般には不評でした。この時期の作品に、散切物の『島衛月白浪』、世話物の『天衣紛上野初花』などがあります。落語の名匠三遊亭円朝も明治初期に活躍し、『真景累ヶ淵』などを創作しました。その語り口は、言文一致体の文章の誕生にも影響しています。	
	和歌・俳諧	和歌は、明治20年代までは桂園派を中心とする旧派の支配下にありました。宮中の御歌掛の歌人高崎正風がその領袖です。俳諧は目立った作者はいませんが、江戸時代から引き続き一般の間に盛んで、撰集も多数刊行されています。中には新時代の事物・風俗を題材にして新味を出した作も見られますが、概して発想や表現が画一的で、後に正岡子規により、天保以後の俳諧は一括して「月並調」と批判されることになります。	
	漢詩文	漢詩文は、欧化の風の吹いた明治時代になっても男子の教養の一環として重視され、相変わらず盛んでした。おびただしい数の撰集・個人の詩文集・作詩の参考書が刊行されています。明治初期には、特に森春濤・大沼枕山・小野湖山らの詩名がありました。春濤は清詩、枕山は宋詩、湖山は唐詩を宗とした点が対照的です。	
	詩	明治15年、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎による『新体詩抄』が刊行されました。ヨーロッパの詩の翻訳と、それに倣った創作詩から成る詩集です。それまで「詩」は専ら漢詩を意味していましたが、漢詩に対し、日本語による長詩を「新体詩」と称したものです。七五調文語体という制約はありましたが、日本の近代詩の出発点を成したもので、直後に刊行された竹内節編『新体詩歌』を初め、追随作が続きました。	

通常展示「書物で見る　日本古典文学史」 解説一覧　参考展示

	名　称	解　説	
	参考展示		
	中国文学と日本文学	日本の文学は、古くから中国文学の影響を受けてきました。漢詩文を中心に、各時代において摂取の跡が見られます。奈良～平安時代は『文選【もんぜん】』が重んじられ、平安時代になると唐の白居易（白楽天）の『白氏文集』が広く受容され、後代に及んでいます。南北朝～室町時代は宋の蘇東坡・黄山谷の詩が流行し、中・晩唐詩の撰集『三体詩』が読まれ、五山詩をはじめ文学に投影しています。	
	仏教と日本文学	日本の文学史を語る時、仏教の影響は無視できません。経典では『法華経』や『浄土三部経』が広く読まれ、さまざまなジャンルに影響が及んでいます。平安時代中期に書かれた源信の『往生要集』は、末法思想に基づく浄土信仰と、それに根ざす文学の創作を支えました。説話集や往生伝の編纂も、中国の仏教書の『冥報記』『三宝感応要略録』『瑞応伝』や『法苑珠林』などを抜きにしては考えられないものです。	
	出版と美術と文芸と ―近世文学の広がり―	出版の普及は、近世の文化と文学に広がりと奥行きを与えました。ここではその豊かさの一面を、摺り物（俳諧一枚摺）・狂歌絵本・浮世絵に尋ねます。当時の出版の概況を窺うために、本屋の出版目録（書籍目録）も示します。摺り物は注文制作による非売品、その素朴なたたずまいも、歌麿による狂歌絵本や豊国による浮世絵の豪華さも、みなそれぞれに味わい深いものです。	